

イントロダクション
——National Characters について

<授業のポイント>

この授業では、異文化理解に必要な情報にアクセスし、それを読み解いたうえで、さらに独自のリサーチ結果としてまとめ発信するという一連の作業を、英語を用いて行う練習をしていただきます。

<授業の進め方>

異文化理解科目（英語）B は、英語圏の、あるいは英語に関係のある様々な文化事象に、リサーチとプレゼンテーションを通してアプローチを試みる授業です。各週の授業では、講師がテーマを設定し基本となる資料をお渡しします。資料はプリントや電子ファイルの形でお配りします。受講生は、

- 1) 資料をしっかりと読みこなし
- 2) 調査の必要な事柄を発見し
- 3) ウェブなどで情報を収集し
- 4) リサーチの成果を報告する

という一連の作業を行うことを求められます。リサーチとプレゼンテーションは、グループで行っていただきます。OpenOffice のインストール CD を初回に配布しますので、その中のプレゼンテーションソフトである Impress を主に使いながら、発表用資料を作成していただきます。プレゼンテーションは基本的に英語で行う予定ですが、英語の正確さよりも、短時間で情報を処理し発表するスキルを磨くことが主な目標ですので、失敗を恐れずに積極的に参加してください。

また、各週のテーマについて、講師が補足の説明を行います。

<成績評価について>

本科目は、講師による解説が中心の「講義」というよりも、受講生の参加によって成り立つ「演習」の要素が強い授業です。したがって成績評価も、「出席」「授業での活動への参加」「課題の提出」を重視します。お仕事の都合などで欠席される場合もあると思いますので、講師やグループのメンバーとの連絡を密にとり、担当箇所の資料をメールで送るなどの工夫をしてください。

成績評価に影響する課題は

- 1) グループによるリサーチとプレゼンテーション（1グループ1回あたり5分以内）
- 2) 受講生それぞれが自由に設定したテーマに基づくプレゼンテーション（全員必ず一度は行う）
- 3) 2番めのプレゼンテーションを元にしたレポートを作成（電子ファイルとしてメールで提出）

の三つです。授業中にお配りした資料や紹介したウェブサイト、音声・映像資料等も、レポート作成の際に大いに活用してください。

<今週の授業内容>

今回は授業全体のイントロダクションとして、授業で使用するコンピュータの設定（ネット接続、ソフトのインストール等）を行います。それが済んだら、早速今回のテーマに関する資料を読み、リサーチやディスカッションをしながら、授業の進め方とコンピュータの使用法を説明していきます。

1. コンピュータの環境設定 （配布資料を参照）

- ・ネット接続——教室でコンピュータをネット接続するためには、特別な設定が必要です。配布資料を参考に、接続してみましょう。
- ・WebCTの説明——大阪大学の授業支援システムである WebCT を、授業で使用する資料の置き場所および、作成した資料の提出先として利用します。ログイン方法や、資料へのアクセス方法などを説明します。
- ・Impress のインストール——インストール CD を使って、使用するコンピュータに OpenOffice をインストールします。また Impress の基本的な使い方を解説したマニュアルをお渡しします。

2. テーマ解説

今回は、national characters 「お国柄」をテーマに、資料を読み、リサーチしていきます。英語圏の様々な国や地域には、それぞれ性質の異なる文化が根付いています。それらの文化を一言で言い表すとどうなるのでしょうか。イギリスは〇〇の国で、アメリカを象徴するのは△△だ、というように、それぞれの国や地域の文化をどのように特徴づけることができるか考えてみましょう。

3. アメリカ・イギリス・カナダの national characters （資料 1）

カナダの小説家 Margaret Atwood が、カナダ文学史についての本の中で、アメリカ・イギリス・カナダの特徴をそれぞれ一言で説明しています。まずその箇所を原文で読んでみましょう。

4. グループで資料を読解 （資料 1）

資料をいくつかのパートに分け、グループごとに担当箇所を決めます。協力して、担当箇所の内容を読解し、クラスの前で解説していただきます。（解説は日本語で良い。Impress で報告用資料を作成しましょう。）さらに読んでいて不明の箇所があれば、インターネットで検索して調べてみてください。

5. 講師による解説 （資料 1、資料 2）

資料 1 にあったイギリスの特徴について別の観点からアプローチするために、サッカーが現在のような形になるまでの歴史についての資料を読みます。

6. グループでのリサーチとプレゼンテーション （資料 1、資料 2）

資料 1 と 2 の内容を参考にしながら、さらにリサーチを行います。調べて発表したいテーマをグループごとに話し合い、リサーチと資料作成の役割分担を決めてください。授業の残り時間は発表のためのリサーチと資料作成に充てます。プレゼンテーションは次週以降に行いますので、グループのメンバー同士で連絡を取り合って準備を進めてください。

リサーチ・テーマの例——

- ・資料では触れられていない国や地域について、特徴的なことは何か調べる。
- ・お国柄をよく表していると思う作品（小説・映画など）を取り上げて解説する。
- ・*Survival* で述べられている定義が、今も有効かどうか、最近の資料を調べて報告する。

The American Cause and Creed

<授業のポイント>

前回講義資料で読んだように、アメリカのシンボルとして「フロンティア」を挙げることができます。前進し拡大し続け、常に可能性に向けて邁進する未来志向の考え方が、「フロンティア」の概念には含まれています。オバマ大統領もまた、そうしたレトリックに訴えかけ、変化の可能性を示すことで支持を集め、ノーベル平和賞を受賞するまでに至りました。それは非常に斬新なものであると同時に、アメリカの伝統にきわめて忠実なものでもあります。既に過去の講義でもこうした伝統の継承について言及しましたが、今回は実際の資料をしっかりと読みこみながら、アメリカという国を束ねる「大義」(cause)と「信条」(creed)の重要性について考えてみましょう。

1. フロンティアについての補足 (資料1)

- ・ 地理的概念としての「フロンティア」からシンボリックな「フロンティア」へ
- ・ JFKの「新たなフロンティア」
- ・ 「丘の上の町」とは何か

2. オバマ関連のスピーチ (資料2)

- ・ オバマによる主要なスピーチを聞く／B・スプリングスティーンによる応援演説を聞く
- ・ スピーチの文章を読んで、内容を確認する
- ・ グループごとに担当を決めて、内容の説明を行う
- ・ どのようなものがアメリカを束ねる「大義」「信条」として述べられているかに注目する

3. 補足資料——オバマが依拠するアメリカの伝統 (資料3)

- ・ 「メイフラワー誓約」、独立宣言、合衆国憲法序文、ゲティスバーグ演説、「私には夢がある」
- ・ 植民開始から独立、国家建設、南北戦争、公民権運動という流れの中で受け継がれてきたアメリカ的価値について考える
- ・ こうした伝統の文脈をふまえて、もう一度オバマ関連のスピーチを読み直してみる

参考文献

上岡伸雄編著『名演説で学ぶアメリカの文化と社会』研究社、2009年10月25日

斉藤眞『アメリカとは何か』平凡社、1995年

猿谷要『検証アメリカ500年の物語』平凡社、2004年

Fiorina, Morris P., Samuel J. Abrams and Jeremy C. Pope. *Culture War? The Myth of a Polarized America. Second Edition.* New York: Pearson Longman, 2006.

資料1

A. 「フロンティア」の定義

初めのうち西部というのは、漠然とアパラチア山脈の西に広がる大地を指していた。しかし開拓の最前線（フロンティア）が西へ移動するにつれて、西部の概念も西へ移動する。

フロンティアというのは1マイル平方の土地に2～6人の人口の土地を指し、このフロンティアに接している土地を広くフロンティア社会と呼んだ。1マイルといえは約1600メートルだから、非常に広い土地に一家族が住んでいる程度がフロンティアだった。（猿谷 96）

B. 「明白な天命」

このような膨張熱は、1840年代なかばにピークを迎える。1844年の大統領選で当選したジェームズ・ポークのスローガンは、「オレゴンの獲得とテキサスの併合」だった。

一つの決め手になったのは、1845年7月に『デモクラティック・レビュー』という雑誌の編集者ジョン・オサリヴァンが、「明白な天命」（マニフェスト・デスティニー）という表現を初めて使ったことである。

この言葉はひとたび発せられると、雷のように人びとの心を打った。アメリカ人は神から選ばれた存在であり、この大陸全体に広がって周辺の劣等な民族を教化するのは神から与えられた使命である、というこの表現に、人びとは一も二もなく飛びついたのだ。それは一種の宗教心のような熱を帯びて、人びとの心を捉えた。（猿谷 98）

C. 自由の空間としてのアメリカ

この体制と空間の重複的解釈〔アメリカ＝自由、ヨーロッパ＝専制〕は、さらにつきつめると、アメリカ大陸は元来「自由」が発展すべく神の摂理によってあらかじめ選ばれているのだという「地理的予定説」にまでなっていく。そこに、好むと好まざるとにかかわらず、「自由」の体制、アメリカ的体制は、アメリカ大陸に拡大するという「宿命」の論理が生じ、また「自由」をアメリカ大陸に普及させるのが、道徳的「使命」であるという「使命」の論理あるいは倫理が生じてくる。（...）したがって、アメリカの政治制度、さらに広く制度一般は、ヨーロッパのそれとは異なる、独自のものであるという信念、特殊性の意識は、同時にそれが世界に冠たるものであり、世界の範たるべきものであるという信念、普遍性の意識と表裏をなしていたのである。普遍的なものであるが故に、それは事実上にも普遍化してもよい、しなければならないという発想が出てくる。そうした発想に基づいて、アメリカ合衆国の膨張やアメリカ合衆国による他国への干渉は、そうした普遍的なものの他国における顕在化であり、またそのための「教育」なのであるとして正当化されてくる。（斉藤 193-194）

資料3

A. 多様なものをいかにして統合するか

(...) 確かに近年急激にアメリカの人口構成、文化が多元化し多様化しているが、元来、アメリカという国は昔から多民族的な社会ではなかったか。昔から人種的にも民族的にもいろいろな人種・民族があり、したがって文化的にも宗教的にもきわめて多様であったのであって、その多元性・多様性はアメリカ社会の形成以来つきまとっていることではなかったか、ということがまず話の前提になります。(...)

そういう意味で、アメリカ社会は元来「ストレインジャーズ」、相互に他者、よそ者、知らない者同士、見知らぬ者同士の社会である。(...) したがって、それだけに、そういう元来縁のない人間がどうやって一つのアメリカ社会を構成するのか、一つのアメリカという国を構成するのかということがアメリカの昔からの一つの大きな課題であったわけです。

では、そういう本来別々のもの、分裂しそうなものをいかに統合していくのか、ユナイトしていく契機は何か。一つは、互いの間の契約関係ではないか。他者同士が契約を相互に結んで縁を作る（法縁？）ということがあります。しかし、そういう法的な契約関係で無縁の者を結び合わせるだけでは、ほんとうの一つのまとまり、ナショナル・コミュニティというものは出来にくい。そうするとそこにもう一つ、何か共通な考え方とか価値の観念とか、あるいは信条というところ堅苦しくなりますが、クリード、——そういうものを育てていく、共有することが必要であったと言えるのではないかと思います。(斉藤 344-345)

B. 「メイフラワー誓約」全文

(この誓約は、イギリスからの移民をアメリカの植民地に運んできたメイフラワー号の船上で読み上げられたものである。当初予定していた場所に上陸できず、乗客の間で意見の食い違いが生じ、それぞれ別行動を取ろうという雰囲気になった。そこで全員をまとめ上げるための「契約書」として、この誓約が急遽作られたと考えられている。)

Mayflower Compact, Agreement Between the Settlers at New Plymouth (1620)

IN THE NAME OF GOD, AMEN. We, whose names are underwritten, the Loyal Subjects of our dread Sovereign Lord King *James*, by the Grace of God, of *Great Britain, France, and Ireland*, King, *Defender of the Faith*, &c. Having undertaken for the Glory of God, and Advancement of the Christian Faith, and the Honour of our King and Country, a Voyage to plant the first Colony in the northern Parts of *Virginia*; Do by these Presents, solemnly and mutually, in the Presence of God and one another, covenant and combine ourselves together into a civil Body Politick, for our better Ordering and Preservation, and Furtherance of the Ends aforesaid: And by Virtue hereof do enact, constitute, and frame, such just and equal Laws, Ordinances, Acts, Constitutions, and Officers, from time to time, as shall be thought most meet and convenient for the general Good of the Colony; unto which we promise all due Submission and Obedience. IN WITNESS whereof we have hereunto subscribed our names at *Cape-Cod* the eleventh of November, in the Reign of our Sovereign Lord King *James*, of *England, France, and Ireland*, the eighteenth, and of *Scotland* the fifty-fourth, *Anno Domini* 1620.

「メイフラワー誓約」邦訳

神の名に於いて、アーメン。我等の統治者たる君主、又神意により英王国（グレート・ブリトン）、フランス及びアイルランドの王にして又信仰の擁護者たるジェームズ王の忠誠なる臣民たる我等下名は、神の栄光のため、基督教の信仰の増進のため、及び我が国王と祖国の名誉のために、ヴァージニアの北部地方に於ける最初の植民地を創設せんとして航海を企てたものであるが、ここに本証書により、厳肅かつ相互に契約し、神と各自相互の前で、契約により結合して政治団体を作り、以て我等の共同の秩序と安全を保ち進め、且つ上掲の目的の遂行を図ろうとする。そして今後之に基き、植民地一般の幸福のため最も適当と認められる所により、随時、正義公正な、法律、命令等を発し、憲法を制定し、又公職を組織すべく、我等はすべて之等に対し、当然の服従をすべきことを誓約する。A・D・1620年、英王国、フランス及びアイルランド王としてのジェームズ王の治世の第18年、スコットランド王としての治世第54年、11月11日、ケープコッドに於いて、

以下41名の署名
(高木八尺訳：斉藤 358-359)

C. 独立宣言が生み出す新たな共通の価値

アメリカ社会というのは、結局、当初はヨーロッパから、後には世界各地から人種・民族・宗教・文化その他の異なる人たちが移住してきて形成した、あるいは形成しつつある社会です。その意味で、繰り返しになりますが、本質的には他者、よそ者、見知らぬ者同士の集団です。それを一つの社会に統合していくという場合、一つには法的な契約で相互をまとめて一つの政治体を作っていくことが必要になります。植民地時代に西へ移住しますと、その移住した人たちの間でそういう契約を作って、新しいタウンを作り、後から来た人はその契約に参加するという形を取ります。(…) 独立にさいし、かくして13のステイトが出来るわけですが、そういう各ステイトを代表する人びとが1787年に集まり、今度はアメリカ全体を一つの国にする、「ザ・ユナイテッド・ステイツ」形成の案を作る。ユナイテッド・ステイツというのは、それまでは国家の集まりであったのですが、「われわれ、ユナイテッド・ステイツの人民が」合衆国憲法を制定することによって、ザ・ユナイテッド・ステイツ・オブ・アメリカを改めて一つの国家にする。つまり、歴史的に、アメリカ社会は、元来多元的なものを契約で結んで一つのものに統合するということをしてきたと思います。

ただ、その場合にもう一つ重要なことは、ただ縁なき者が何か契約で結ばれるということだけではなく、やはりそこに何か共通の価値、信条を共有するということが前提とされるということです。先ほど申し上げたように、このプリマスの場合には、ピューリタンもよそ者も広い意味のプロテスタントですから、「神の栄光のために」とか、あるいはいずれもイギリス人ですから「祖国のために」ということで共通の目的を持ち得たわけです。しかし、その後アメリカ社会にいろいろな人々が移住してくる。ドイツ、フランスからも来る、カトリック系の人も来る、ユダヤ教の人も少しではあるが来るということになります。さらに、啓蒙主義の影響も出てくる、理神論も不可知論も入るということになると、もう「神の栄光のために」というわけにはいかない。より広く共有できるものが必要とされてきます。個人的にはそれぞれ別の信仰、別の考え方をもちつつ、しかし、アメリカ社会全体としてそれらと矛盾しない一つの共通の価値を持つ必要がある。それを、提示したのが独立宣言ではないでしょうか。

独立宣言というのは、イギリスから独立するというだけの宣言ではございません。「独立宣言」と呼ばれておりますが（正式にはそういうタイトルはついておりません）、元来は、なぜイギリスから独立しなければならないか、という理由、大義。コーズの宣言です。イギリスから分離する大義が、実は同時に、これからアメ

リカという新しい国（当初は国の連合ですが）を作っていく大義になるわけです。そういう意味で、独立宣言はイギリスからの分離宣言であるが、同時に、アメリカを統合する統合宣言でもあると私は解釈しております。（斉藤 368-371）

D. 独立宣言

Declaration of Independence (July 4, 1776)

We hold these truths to be self-evident: That all men are created equal; that they are endowed by their Creator with certain unalienable rights; that among these are life, liberty, and the pursuit of happiness; that, to secure these rights, governments are instituted among men, deriving their just powers from the consent of the governed; that whenever any form of government becomes destructive of these ends, it is the right of the people to alter or to abolish it, and to institute new government, laying its foundation on such principles, and organizing its powers in such form, as to them shall seem most likely to effect their safety and happiness. . . .

独立宣言邦訳

我々は、次の真理は別に説明を必要としないほど明らかなものであると信じる。すなわち、全て人間は平等に作られている。全て人間は創造主によって、誰にも譲ることのできない一定の権利を与えられている。これらの権利の中には、生命、自由、そして幸福の追求が含まれる。これらの権利を確保するために、人びとの間に政府が設置されるのであって、政府の権力はそれに被治者が同意を与える場合にのみ、正当とされるのである。いかなる形体の政府であれ、こうした政府本来の目的を破壊するようになれば、そうした政府をいつでも改変し廃止することは国民の権利である。そして、国民の安全と幸福とに最も役立つと思われる原理や権限組織に基づいて、新しい政府を設立する権利を国民は持っている。（斉藤真訳：斉藤 134）

E. Constitution of the United States: Preamble

We, the people of the United States, in order to form a more perfect Union, establish justice, insure domestic tranquility, provide for the common defense, promote the general welfare, and secure the blessings of liberty to ourselves and our posterity, do ordain and establish this Constitution for the United States of America.

F. Abraham Lincoln, The Gettysburg Address (Gettysburg, Pennsylvania, November 19, 1863)

Fourscore and seven years ago our fathers brought forth on this continent, a new nation, conceived in liberty, and dedicated to the proposition that all men are created equal.

Now we are engaged in a great civil war, testing whether that nation, or any nation so conceived and so dedicated, can long endure. We are met on a great battlefield of that war. We have come to dedicate a portion of that field, as a final resting-place for those who here gave their lives that this nation might live. It is altogether fitting and proper that we should do this.

But, in a larger sense, we cannot dedicate. . . we cannot consecrate. . . we cannot hallow. . . this

ground. The brave men, living and dead, who struggled here, have consecrated it, far above our poor power to add or detract. The world will little note, nor long remember what we say here, but it can never forget what they did here. It is for us, the living, rather, to be dedicated here to the unfinished work which they who fought here have thus far so nobly advanced. It is rather for us to be here dedicated to the great task remaining before us. . . that from these honored dead we take increased devotion to that cause for which they gave the last full measure of devotion; that we here highly resolve that these dead shall not have died in vain; that this nation, under God, shall have a new birth of freedom; and that government of the people, by the people, for the people, shall not perish from the earth.

G. Martin Luther King, Jr. "I have a dream" (Lincoln Memorial, Washington D.C., August 28, 1963)

Five score years ago, a great American, in whose symbolic shadow we stand today, signed the Emancipation Proclamation. This momentous decree came as a great beacon light of hope to millions of Negro slaves who had been seared in the flames of withering injustice. It came as a joyous daybreak to end the long night of their captivity.

But one hundred years later, the Negro still is not free. One hundred years later, the life of the Negro is still sadly crippled by the manacles of segregation and the chains of discrimination. One hundred years later, the Negro lives on a lonely island of poverty in the midst of a vast ocean of material prosperity. One hundred years later, the Negro is still languished in the corners of American society and finds himself an exile in his own land. And so we've come here today to dramatize a shameful condition.

In a sense we've come to our nation's capital to cash a check. When the architects of our republic wrote the magnificent words of the Constitution and the Declaration of Independence, they were signing a promissory note to which every American was to fall heir. This note was a promise that all men, yes, black men as well as white men, would be guaranteed the "unalienable Rights" of "Life, Liberty and the pursuit of Happiness." It is obvious today that America has defaulted on this promissory note, insofar as her citizens of color are concerned. Instead of honoring this sacred obligation, America has given the Negro people a bad check, a check which has come back marked "insufficient funds." . . .

We cannot walk alone. And as we walk, we must make the pledge that we shall always march ahead. We cannot turn back. . . .

Let us not wallow in the valley of despair, I say to you today, my friends.

And so even though we face the difficulties of today and tomorrow, I still have a dream. It is a dream deeply rooted in the American dream.

I have a dream that one day this nation will rise up and live out the true meaning of its creed: "We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal."

I have a dream that one day on the red hills of Georgia, the sons of former slaves and the sons of former slave owners will be able to sit down together at the table of brotherhood.

I have a dream that one day even the state of Mississippi, a state sweltering with the heat of injustice, sweltering with the heat of oppression, will be transformed into an oasis of freedom and justice.

I have a dream that my four little children will one day live in a nation where they will not be judged by the color of their skin but by the content of their character.

I have a *dream* today!

I have a dream that one day, down in Alabama, with its vicious racists, with its governor having his lips dripping with the words of "interposition" and "nullification" -- one day right there in Alabama little black boys and black girls will be able to join hands with little white boys and white girls as sisters and brothers.

I have a *dream* today!

I have a dream that one day every valley shall be exalted, and every hill and mountain shall be made low, the rough places will be made plain, and the crooked places will be made straight; "and the glory of the Lord shall be revealed and all flesh shall see it together."

This is our hope, and this is the faith that I go back to the South with. . . .

And if America is to be a great nation, this must become true. And so let freedom ring from the prodigious hilltops of New Hampshire. Let freedom ring from the mighty mountains of New York. Let freedom ring from the heightening Alleghenies of Pennsylvania. Let freedom ring from the snow-capped Rockies of Colorado. Let freedom ring from the curvaceous slopes of California.

But not only that: Let freedom ring from Stone Mountain of Georgia. Let freedom ring from Lookout Mountain of Tennessee. Let freedom ring from every hill and molehill of Mississippi. From every mountainside, let freedom ring.

And when this happens, when we allow freedom ring, when we let it ring from every village and every hamlet, from every state and every city, we will be able to speed up that day when *all* of God's children, black men and white men, Jews and Gentiles, Protestants and Catholics, will be able to join hands and sing in the words of the old Negro spiritual:

Free at last! Free at last!

Thank God Almighty, we are free at last!

H. アメリカは分裂しているのか——資料2、スピーチAについての反論

Barack Obama's speech to the Democratic National Convention was widely applauded, in part, we suspect, because many heard it as a welcome call for reconciliation—a plea for Americans to overcome their differences and discover their commonalities. As we will show in Chapters 3-6, however, contemporary Americans are not particularly polarized in their political positions, nor have they become appreciably more so in recent decades. Widespread beliefs to the contrary notwithstanding, the notion of a deeply divided population is largely a myth. (Fiorina, et al. 11-12)

Automobiles and Roads

<授業のポイント>

アメリカは車社会であるとよく言われますが、実際はどうなのでしょう。あるいは他の国ではまた事情が違うのでしょうか。今回は、アメリカの自動車と道路事情についていくつかの資料を確認し、さらにイギリス、オーストラリアとの比較もしてみます。その中で、環境問題や古き良き文化の保護など、様々なテーマが浮上してくるでしょう。車との付き合い方にも、それぞれの地域の違いが表れてくると思いますので、良く考えてみてください。資料を読み、適宜クラスでのディスカッションを行います。

1. 車社会アメリカ（資料1）

Bill Bryson の著書、*I'm a Stranger Here Myself*(1999)の中から、“Why No One Walks”と題された章を読みます。若干の脚色はあるものの、かなりリアルな描写がなされています。原文を一部省略してありますが、今回も全体を三つのパートに分けましたので、グループごとに担当を決めて、説明していただきます。

2. ロサンゼルスの大渋滞（資料2）

Richard Powers の小説、*Operation Wandering Soul* (1993)からの抜粋を読みます。意図的に凝った文体で書かれているので、相当読みづらいとは思いますが、講師が試みに訳したものを付けましたので、何とか解説してみましよう。

<あらすじ> LA の小児科病棟に勤務する医師 Kraft は、末期の病に冒された子供たちのために、様々な作り話をして聞かせるが、次第に自分自身の物語を語ることを余儀なくされていく…。引用箇所は小説の冒頭、Kraft がフリーウェイに乗って、渋滞に巻き込まれるところです。

3. 「4の力」で解決できる（資料3）

俳優の Tom Hanks が娘の卒業式に Vassar College で行ったスピーチを聞きます。さすがに一流の役者だけあって、間の取り方が絶妙です。Hanks が言う「4の力」とは何か、注意して聞いてみてください。ちなみにこのスピーチでは、資料2で描かれる状況にも言及されています。

4. 自動車に厳しいイギリスの政策（資料4）

Jon Gaunt が保守的で愛国的な立場から書いたイギリス擁護論、*Gaunt's Best of British* (2008)からの抜粋を読みます。イギリスでは自動車をめぐる状況が年々厳しくなっているようです。Gaunt は非常に怒っていますが、その怒りの矛先はどこに向けられているのか、注意して読んでください。

5. アメリカ人が見たオーストラリアの風景（資料5）

Bill Bryson がオーストラリアを旅して書いた別の著書、*In a Sunburned Country* 改訂版(2001)からの抜粋を読みます。Bryson はシドニーから少し西に行った山間の道路を走っていて、ある不思議な感覚に襲われます。そのせいで彼はオーストラリアが好きになるのですが、いったい彼は何を感じたのでしょうか。

※今回使用する資料の出典は、各資料の冒頭に明記してあります。

もっとオーストラリアを知ろう

<授業のポイント>

世界的にみると、オーストラリアはあまり注目されていないようです。英語圏でありながら、他の英語圏の国々に伝えられるオーストラリアについての情報はきわめて少ないようです。その一方で、オーストラリアについて外部の人々が抱くイメージというものが確固としてあるのも事実です。今回は、オーストラリアにまつわる雑多なキーワードを見ていながら、本当のところはどうか、考えてみましょう。

1. ディスカッション——オーストラリアと言えば？ （資料1）

- ・まずクラスで話し合い、オーストラリアと言って思い浮かべる物事をリストアップします。
- ・配布資料1を見ながら、オーストラリアの基本的なデータを確認します。

2. オーストラリア人の声 （資料2）

- ・木谷朋子の本の中から、シドニーとメルボルンで採録された現地の人のお話を聞きます。
- ・スピーチの文章を見ながら、気になるポイントをピックアップします。

3. オーストラリアについて知っておきたい事実 （資料3）

- ・資料2でピックアップしたポイントや、その他押さえておきたい事項について、資料を読みます。

4. プレゼンテーション用資料 （資料4）

- ・今回もオーストラリアに関する英文資料をお渡ししますので、グループごとに分担して内容を確認し、解説していただきます。

5. ケーススタディー

- ・今回の授業内容について具体的に確認するために、映画を2本観ます。
- ・『プリシラ』(*The Adventures of Priscilla, Queen of the Desert*, 1994) ——シドニーのドラッグクイーン3人が、アリススプリングスでショーを行うために、プリシラという名のバスに乗って旅をする。
- ・『オーストラリア』(*Australia*, 2008) ——第二次世界大戦期のオーストラリア北部。イギリスの貴婦人が帰りの遅い夫を探して、彼が所有する農場を訪れる。しかし夫は何者かに殺害されており、彼女は現地の牛追い人たちと協力して、自力で牛たちを港まで運ぶ羽目になる。

参考文献

Bryson, Bill. *In a Sunburned Country*. New York: Broadway Books, 2001.

デビッド・デール著、小林健／久村研訳『オーストラリア100の常識』大修館書店、1998年

木谷朋子『Live from オーストラリア 学んで旅するシドニー&メルボルン』The Japan Times、2009年

資料 1

正式名称：The Commonwealth of Australia——Commonwealth は連邦と訳され、かつては大英帝国の一部だったが後に独立した国々（およびその属領）からなる結合体を指す。オーストラリアは、1901年に六つの植民地が連合し、独立オーストラリアが形成された。

国家最高権力者：イギリス国王。現在も形の上ではエリザベス女王がオーストラリア女王となっている。イギリスによる統治を廃止し、大統領を選出しアメリカのような共和制に移行するかどうかの議論が盛んに行われたが、1999年の国民投票の結果、現行体制の継続が決まった。国旗には南十字星とユニオンジャックのデザインが施されている。

首都：Canberra。シドニーやメルボルンの方が大都市なので、そちらが首都だと思われがちだが、それらは旧植民地（現在は州）の州都。キャンベラは、アメリカのワシントン D.C.と同じく、連邦の首都として割譲され、新たに建造された特別行政区で、どの州にも属していない（Australian Capital Territory として別に分類されている）。

国土面積：約 760 万平方キロメートル。世界最小の大陸であり、世界最大の島。また一つの大陸が一つの国家で占有されている唯一の例。広大なため、国内に三つの標準時（time zones）が設定されている。

人口（2009年推計）：約 2,200 万人。したがって、人口密度は一平方キロメートル当たり 2.8 人程度と極めて低い。

言語：実質的には英語が国語だが、正式にそう決められているわけではない。移民が多いので、外国語での放送も充実している。英語はイギリス英語を基本にしており、独自の言い回しが多数用いられるものの、比較的分かりやすい発音となっている。良く引き合いに出されるオーストラリア英語の例としては、“Good day, mate” や “No worries” がある。前者をはっきりと「グッダイ、マイト」と発音するのが、いかにもオージーらしいと思われているが、個人差はあるだろう。

Key words and phrases：オーストラリアについての本や映画などには、次のような言葉が良く出てくる。それぞれどのような意味だろうか。調べてみよう。

- Bush

- Outback

- Tall poppies

- Uluru

- Australian salute

- Pokies

- Anzac Day

資料1 解説

Bush, outback and Uluru

I believe I first realized I was going to like the Australian outback when I read that the Simpson Desert, an area bigger than some European countries, was named in 1932 for a manufacturer of washing machines. (Specifically, Alfred Simpson, who funded an aerial survey.) It wasn't so much the pleasingly unheroic nature of the name as the knowledge that an expanse of Australia more than 100,000 miles square didn't even *have* a name until less than seventy years ago. I have near relatives who have had names longer than that.

But then that's the thing about the outback—it's so vast and forbidding that much of it is still scarcely charted. Even Uluru, as we must learn to call Ayers Rock, was unseen by anyone but its Aboriginal caretakers until only a little over a century ago. It's not even possible to say quite where the outback is. To Australians anything vaguely rural is "the bush." At some indeterminate point "the bush" becomes "the outback." Push on for another tow thousand miles or so and eventually you come to bush again, and then a city, and then the sea. And that's Australia. (Bryson 20)

Tall poppies

ひなげしの花も伸び過ぎると良くありません。目立ち過ぎます。このような人、つまり金持ち、権力者、成功者をオーストラリア人は「ノッポのひなげし」[tall poppies]と呼び、彼らを疑いの目で見ます。そして、ちょっとでも自惚れが目立つと、適当なサイズに切り詰めるのです。この行為を「ノッポのひなげし症候群」[tall poppy syndrome]と言いますが、これこそオーストラリア社会の健全さの現れのひとつと言えるでしょう。このような気風は流刑時代に培われたものと考えられます。シドニー湾付近の屋外監獄に収容された流刑囚が看守に抵抗する唯一の方法は、彼らに関する下品なゴシップを飛ばすことでした。今日、その矛先はもっとも一般的には、政治家や企業家、さらには海外に移り住んでアメリカ英語訛りで話す芸能人たちに向けられます。

「ノッポのひなげし症候群」の被害者たちは、これは自分たちに対する嫉妬によるもの、平凡が望ましいとする考えからきている、と言います。しかし、オーストラリア人は英雄を乱造することの馬鹿馬鹿しさを知っています。それは後になってがっかりさせられる恐れがあるからです。アメリカ人の場合はもっと素直に有名人を崇拜しますから、それだけによく失望させられるのです。(デール 55-56)

Pokies

壁をよじ登っている 2 匹のハエにもオーストラリア人は賭けをする、と言われていますが、実際に、国民 1 人あたり年間 2100 ドルという数字は、欧米のどの国よりもギャンブルにお金を使っていることを表しています。しかし、本当にギャンブル中毒になっているのは、個人よりむしろ州政府の方です。州政府はその運用資金の多くを、ポーカーゲーム機、くじ、競馬そしてカジノからの収入に頼っています。州政府はギャンブル産業から年間 21 億ドルを税金として徴収しています。もしその収入がなければ、住民に余計な税を課さなければならなくなるでしょう。さらに、州政府が良く指摘することですが、ギャンブル産業のおかげで 3 万 2000 人に対する仕事が確保されています。

オーストラリア人が一番お金を使うのは、アメリカで言ういわゆる「スロット・マシーン」です。オ

オーストラリアではそれを「ポーキー」と呼んでいます。オーストラリアには 12 万台のポーキー（人呼んで「片腕の追いはぎ」）があり、年間 250 億ドルがつぎこまれ、そのうち 210 億ドルが払い戻されています。（デール 146）

Australian salute

オーストラリアの海岸線を探検した 18 世紀のヨーロッパ人の日記に、不思議にも記載されていない生き物があります。この生き物はそこいらじゅうにいるので、それを追い払うジェスチャーは、「グレート・オーストラリアン・サルート[**great Australian salute**]」（偉大なるオーストラリア式敬礼）と呼ばれています。（...）19 世紀までには、ハエは国のシンボルの 1 つとなりました。白人がハエをオーストラリアに運んできたのでしょうか？ そうではありません。でも、白人は牛や羊を運んできました。

ハエは湿った糞を好み、そこで繁殖します。カンガルーやエミユの干からびた糞しか選択の余地がなかった頃には、生存率は低いものでした。ヨーロッパや南アフリカから連れて来られた牛や羊が、貴重な贈り物を大地に残し始めたとき、ハエはその繁殖活動を謳歌し始め、毎年活発になっていきました。（デール 220-221）

Anzac Day

4 月 25 日はオーストラリアの国民の祝日です。わが国最大の戦没者を出した戦いのひとつを記念する日です。第一次世界大戦において、連合軍はトルコ軍の壊滅をねらって、イスタンブールを占拠するというイギリスの作戦案を実行しました。その結果、7600 人のオーストラリア軍将兵と、2500 人のニュージーランド軍将兵がトルコの南岸のガリポリで没しました。

1915 年 4 月 25 日、オーストラリア・ニュージーランド連合軍（アンザック）はガリポリ岬のガバ・ペデに上陸を敢行しました。知らされていたよりも背後の崖ははるかに険しく、敵の守りもはるかに堅固でした。翌日さっそく上層部に撤退案が提出されましたが、返事は、塹壕を掘れ、という命令でした。結局、トルコ軍に対して効果的な攻撃ができないまま 8 ヶ月が過ぎ、とうとう 12 月に撤退することになりました。

いまでもときどき議論されますが、イギリスはトルコ軍の注意をそらすために意図的にアンザックを捨て石に使ったのではないか、ということです。しかし、イギリスもガリポリで 4 万人の将兵を失っていますから、そういう意図ではなく、単にイギリス軍上層部が間抜けだったというのが実態ではないでしょうか。

今日、アンザック・デイには第一次世界大戦だけではなく、すべての戦争に出征したオーストラリア人将兵に敬意を表すことになっています。午前中は陸海空の退役軍人たちが各州都のメイン・ストリートのパレードし、午後は戦友たちと酒を酌み交わして昔話に花を咲かせる、というのが習わしです。（...）アンザック・デイが愛国のシンボルの代わりをつとめてきたとも言えます。（デール 26-27）

※ガリポリの戦いは、映画『誓い』（*Gallipoli*, 1981）で詳細に描かれているので是非観ていただきたい。

特にラストシーンが印象的で、今なお映画好きの語り草になっている。イギリスとの関係や、愛国心について注目して観ると、なぜこの出来事がオーストラリア人にとってこれほまでに重要なのか分かる。

資料3

E. A vast space, small population

オーストラリア人は汗水たらしながら広大な褐色の大地を切り開いている田舎者だ、というイメージをお持ちなら、そのイメージを捨ててください。オーストラリアは世界に名だたる都市型国家なのです。1800万人の人口の80パーセント近くが、たった10の都市に住んでいます。それもみな海沿いの都市で、まるで必死に海岸にしがみついて、イギリスへの帰還船を待っているように思えます。そんなわけで、典型的なオーストラリア人の姿と言えば、ツバ広の帽子をかぶった褐色の農夫ではなく、スーツを着込んだ会社員、あるいはバミューダ・パンツを履いたサーファーといったところでしょう。

国土の大半はガラガラです。人口密度は世界最低の1平方キロあたり2人。ちなみに、カナダですら3人ですし、アメリカは26人、インドネシアは99人、イギリスは235人、日本は328人です。

実を言うと、「都市型」という言葉はオーストラリア人を言い表すのにはあまり正確ではないかもしれません。むしろ、「郊外型」と言った方が妥当でしょう。それというのも、人口のおよそ70パーセントが郊外に住み、家のローンの返済をしているからです。家を持っている人の割合は世界でも指折りです。もっとも一般的な家の形は赤い屋根瓦の煉瓦造りの一戸建てで、前庭と裏庭があり、裏には当然、回転式の物干し竿であるヒルズ・ホイストとバーベキュー設備があります。(デール 3)

My intention over the next couple of weeks was to wander through what I think of as Civilized Australia—the lower right-hand corner of the country, extending from Brisbane in the north to Adelaide in the south and west. This area covers perhaps 5 percent of the nation's land surface but contains 80 percent of its people and nearly all its important cities (specifically Brisbane, Sydney, Melbourne, Canberra, and Adelaide). In the whole of the vast continent this is pretty much the only part that is conventionally habitable. Because of its curving shape, it is sometimes called the Boomerang Coast. . . . (Bryson 66-67)

F. The New Australians

世界で一番つまらない国と思われていたオーストラリアは1950年代から1990年代の間に世界で一番面白い国に変わりました。第二次世界大戦の直後、人口増加政策が導入され、その一環としてヨーロッパやアジアから500万人の移民がやってきました。その人たちがこの変化の主な要因です。新移民たちは保守的な文化の中に自分たちの技術や考え方をゆっくりと、時には苦勞しながら植え込んでいきました。その結果、旧移民たちは文化が多様であることの素晴らしさを認識するようになったのです。

1947年の国勢調査によりますと、人口の90パーセントがオーストラリア生まれで、8パーセントがイギリスおよびニュージーランド生まれでした。当時は移民を希望する外国人にとって、白豪主義が壁になっていました。1901年の移民制限法の下、移住希望者は「ヨーロッパ言語」の聞き取りテストに合格しなければなりません。アフリカやアジアの人たちにとって、たとえばゲール語やルーマニア語などの知識はまったくありませんから、その結果は惨めなものでした。このような白豪主義は1959年に正式に廃止されましたが、水面下では1973年まで続きました。この年、ホイットラム労働党政権は「人種や肌の色によるいかなる差別も無効」とする法案を通過させたのです。

今日、人口の 78 パーセントがオーストラリア生まれで、イギリス生まれが 6 パーセント、ニュージーランドとイタリアがそれぞれ 2 パーセント、旧ユーゴと中国または香港がそれぞれ 1.5 パーセント、ギリシャとベトナムがそれぞれ 1 パーセントです。

近年、移民の受け入れを極端に抑えていて、現在では年間 7 万人しか受け入れていません。ところが、新しくやって来た人たちは、前からいる人たちよりも頭が良いと見えて、その 11.4 パーセントが「管理職」にあります。後者の場合は 10.9 パーセントです。(デール 5-6)

In World War II it had suffered a kind of blunt trauma when, after the fall of Burma and Singapore, Britain pulled out of the Far East, leaving Australian suddenly alone and dangerously exposed. . . .

Australia escaped but it was left with two scars—a realization that Britain could not be counted on to come to its rescue in a crisis, and a sense of immense vulnerability to the teeming and unstable countries to the north. Both of these matters deeply influenced Australian attitudes in the postwar years—indeed still do. Australia became seized with the conviction that it must populate or perish—that if it didn't use all that empty land and fill all those empty spaces someone from outside might do it for them. So in the years after the war, the country threw open its doors. In the half century after 1945 its population soared, from 7 million to 18 million.

Britain alone couldn't provide the necessary bodies, so people were welcomed from all over Europe, particularly Greece and Italy in the immediate postwar years, making the nation vastly more cosmopolitan. Suddenly Australia was full of people who liked wine and good coffee and olives and eggplants, and realized that spaghetti didn't have to be a vivid orange and come from cans. The whole warp and rhythm of life changed. Good Neighbor Councils were established everywhere to help the immigrants settle and feel welcomed, and the Australian Broadcasting Corporation offered English-language course which were enthusiastically taken up by tens of thousands. By 1970 the country could boast of 2.5 million "New Australians," as they were known. (Bryson 159)

G. Australian English

残念ながら「グッダイ」[Good day]はハリウッド映画に出てくるような言葉ではありません。オーストラリア人と言えどもその点は認めざるを得ません。しかし、実際、オーストラリア人は挨拶言葉として使いますし、男性は本当によく使います。相手の名前が思い出せない時とか、「ああ〜」とか「うう〜」とかの代わりの言葉が欲しい時、あるいは背後から人の背中を刺そうとする時にでも使うでしょう。オーストラリア人は伝統的に「仲間意識」[mateship]、つまり飲み友達同士が強い絆で結ばれていますし、「一蓮托生」[old mates' act] の考えのもと、お互いに助け合うことが必要だと思っています。しかし、この美風も最近では政治や警察の汚職に悪用され、何とも恰好のつかないありさまです。

現在、オーストラリアの英語に見られる特徴の大部分は、囚人たちの用いた素性のはっきりしない方言からきています。たとえば、swag (ナップサック)、larrikin (チンピラ)、open slather (全くの自由)、shout (酒を奢る)、skerrick (ちよと) などがそうです。アボリジニの言語からは何千もの地名をもらっています。そのほかにも、kangaroo、dingo、gone bung (壊れた)、hard yakka (きつい仕事)、within cooee (声の届く範囲) など約 400 語が日常用いられています。

しかし、多くの伝統的な言い回しがアメリカ英語に代わりつつあります。いまや女性のことを sheila と言う人はほとんどいませんし、fair dinkum (正真正銘の、正直な) や true blue (根っからの保守) などは地方のお年寄りが使うだけです。また、cobber (友だち) や bonzer (すばらしい) は 1956 年のテレビの到来と共に廃れました。一方、bastard と bugger は現在でも「奴」くらいの意味で使われていますが、「偉大なるオーストラリア形容詞」の異名を持つ bloody の方は、もっとインターナショナルな f で始まる語に大きく取って代わられました。悲しいのは、goodonya (でかした) が go for it (がんばれ) になりつつある点です。しかし、いまでもアメリカ人をまごつかせる言い方があります。たとえば、ダサイ人を dag (もともとの意味は、羊のお尻のまわりにある糞まみれの毛) と言ったりしますが、アメリカ人にはピンとこないでしょう。また、うぬぼれた人を wanker と呼び、マスターベーション (アメリカ人なら jerk-off と言うでしょうが) を big wank と言います。

オーストラリア人なら、小エビ (shrimp) のようなちっぽけなエビをバーベキューにはしません。もっと大きな車エビ (prawn) です。しかし、言葉を切り詰めて小さくするのは相変わらず大好きです。たとえば、「garbos (清掃局員たち) は arvo (午後) に a smoko (一服) する。ただし、take a sickie (ずる休み) しなれば」などと言ったりします。また、プールサイド・パーティーの招待状に、「今年是我が家の barbie (バーベキュー) のところで kiddies (子供たち) に Chrissie pressies (クリスマス・プレゼント) を渡そうかと思うので、tinnies (缶ビール) と cossie (水着) と mossies (蚊) 除けを持参のこと。」と書いてあったとしても誰ひとり驚かないでしょう。(デール 28-29)

オーストラリアにとってニュージーランドは、イギリスにとってのアイランド、フランスにとってのベルギー、アメリカにとってのカナダと同じ役割を担っています。オーストラリア人は、ニュージーランド人についてのジョークを言ったり、ニュージーランド人をひいき目で見たり、ニュージーランドで休暇を過ごしたりします。さらに、毎年 50 万ものニュージーランド人を受け入れています。(…)

ニュージーランドの 2 つの島が、オーストラリアと合併して、第 7、第 8 の州になる理由は十分にありますが、キウイたちは意外に渋っています。オーストラリア人が自分たちの経済を破壊してしまう、と多分考えているのでしょうが、恐らくその見方は正しいでしょう。

ニュージーランド人の特徴の中で、オーストラリア人が一番おかしいと思っていることは、彼らの言葉、特に母音の発音です。フィッシュ・アンド・チップスを彼らが言うと、ファッシュ・アンド・チャップス、「アパート探し」と言う意味のフラット・ハンティングは、フレット・ハンティングなどとオーストラリア人の耳には聞こえます。

1994 年にオーストラリア人はショックを受けました。それは、間もなくオーストラリア人もニュージーランド人のような発音で話すようになるだろう、という研究発表があったからです。ビクトリア大学の言語学 (英語でリングイスティックスですが、リンガスタックスと発音すべきでしょうか?) の教授 ジェネット・ホームズのこの発表は、次のような内容です。つまり、英語は母音推移が起こっている。ニュージーランド人はすでにその推移を完了し、“ear” (耳) と “air” (空気)、“here” (ここ) と “hair” (毛)、“beer” (ビール) と “bear” (熊) などと同じように発音している。オーストラリアはその途上にある。推移が終われば、コミュニケーションは少なくとももっと楽になるだろう [Et least ut wull make communucation easier]、と。(デール 218-219)

H. Transportation of the convicts: the origin of Australia

Never before had so many people been moved such a great distance at such expense—and all to be incarcerated. By modern standards (by any standards really), their punishments were ludicrously disproportionate. Most were small-time thieves. Britain wasn't trying to rid itself of dangerous criminals so much as thin our an underclass. The bulk were being sent to the ends of the earth for stealing trifles. One famously luckless soul had been caught taking twelve cucumber plants. Another had unwisely pocketed a book called *A Summary Account of the Flourishing State of the Island Tobago*. Most of the crimes smacked either of desperation or of temptation unsuccessfully resisted.

Generally the term of “transportation” was seven years, but since there was no provision for their return and few could hope to raise the fare, passage to Australia was effectively a life sentence. But then this was an unforgiving age. By the late eighteenth century Britain's statute books were weighty with capital offenses; you could be hanged for any of two hundred acts, including, notably, “impersonating an Egyptian.” In such circumstances, transportation was quite a merciful alternative. (Bryson 48-49)

The gold rush transformed Australia's destiny. Before it, people could scarcely be induced to settle there. Now a stampede rose from every quarter of the globe. In less than a decade, the country took in 600,000 new faces, more than doubling its population. The bulk of that growth was in Victoria, where the richest goldfields were. Melbourne became larger than Sydney and for a time was probably the richest city in the world per head of population. But the real effect of gold was to put an end to transportation. When it was realized in London that transportation was seen as an opportunity rather than a punishment, the convicts *desired* to be sent to Australia, the notion of keeping the country a prison became unsustainable. A few boatloads of convicts were sent to Western Australia until 1868 (they would find gold there as well, in equally gratifying quantities) but essentially the gold rush of the 1850s marked the end of Australia as a concentration camp and its beginning as a nation. (Bryson 80-81)

I. Parks in Australian cities: a British heritage

Central Adelaide boasts almost eighteen hundred acres of parks, less than Canberra, but a great deal more than most other cities of its size. As so often in Australia, they reflect an effort to recreate a familiarly British ambience in an antipodean setting. Of all the things people longed for when they first came to Australia, an English backdrop was perhaps the most outstanding. It is notable, when you look at early paintings of the country, how awkward, how strikingly un-Australian, the landscape so often appears. . . . Australia was a disappointment to the early settlers. They ached for English air and English vistas. So when they built their cities, they laid them out with rolling English-style parks arrayed with stands of oak, beech, chestnut, and elm. . . . Adelaide is the driest city in the driest state in the driest continent, but you would never guess it from wandering through its parks. Here it is forever Sussex. (Bryson 124)

Varieties of English

<授業のポイント>

私たちが英語を勉強する、または英語を話せるという時の「英語」とは何を指しているのでしょうか。英語には正式なものとそうでないものがあるのでしょうか。近年の英語教育では世界英語（World Englishes）の考えが主流になってきています。様々な場所で話される様々な種類の英語を複数形の Englishes として捉え、それらの間の優劣ではなく、多様性を重視するということです。英語を学ぶのであれば、自分の使う英語はどんな種類のもので、またどういった英語を目標にするのかを明確にしておくべきでしょう。

1. 英文読解&プレゼンテーション（資料1）

- ・今回は長めの文章を資料としてお渡ししますので、グループで分担して内容を確認し、報告してください。

2. リスニング（資料2）

- ・ Andy Kirkpatrick の *World Englishes* に収録されているスピーチを聞きます。
 - a. アメリカ南部出身の女性——ゆったりとした南部の発音
 - b. アメリカ南部にルーツを持つフィラデルフィア在住の黒人男性——様々な英語を使い分ける

3. アメリカ英語のヴァリエーション（資料3、資料4）

- ・リスニングに出てきたアメリカの黒人英語と南部訛りについての補足資料を読みます。
- ・イギリスとアメリカの「標準英語」を比較します。
- ・その他イギリスとアメリカの英語の違いについて意見交換をします。

4. 世界英語の分類（資料5）

- ・世界の様々な英語を学術的に分類しようという試みが続けられています。詳細はかなり込み入っているのですが、ひとまず概説を読んでおきましょう。特に様々な英語の分類が進むにつれて、どのような問題が浮上してきたかに着目しましょう。

<参考文献>

Abley, Mark. *The Prodigal Tongue: Dispatches from the Future of English*. London: Arrow Books, 2009.

Elster, Charles Harrington. *What in the Word? Wordplay, Word Lore, and Answers to Your Peskiest Questions about Language*. Orlando: Harcourt, 2005.

Kirkpatrick, Andy. *World Englishes: Implications for International Communication and English Language Teaching*. Cambridge: Cambridge UP, 2007.

Paxman, Jeremy. *The English*. London: Penguin, 1999.